

校名：千葉大学教育学部附属幼稚園

所在地：〒263-8522 千葉市稲毛区弥生町 1-33

電話番号：043-251-9001

記載日： H28 年 5 月 20 日 記載者：入澤里子 記載者役職：副園長

貴校の校風、おおまかな特色について：

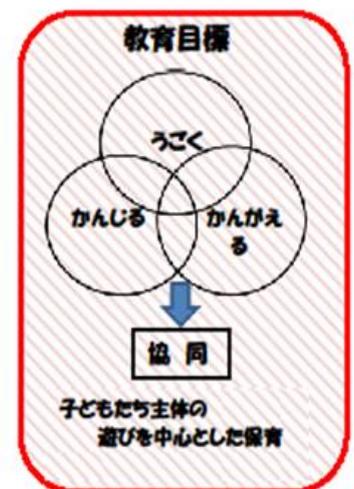
本園は明治36年（1903年）に千葉幼稚園として創立した歴史ある幼稚園である。JR西千葉駅前、千葉大学西千葉キャンパスの南に位置し、商店街や比較的交通量の多い道路に隣接しており、園のまわりは学校・住宅地域となっている。園地は面積約9,300㎡で広々としており、子どもたちが「夢の森」と呼んでいる森を有するなど、自然にも恵まれている。子どもたちは、徒歩あるいは公共の乗り物を使って、通園時間30分以内の園の指定する地域内から通園している。教育熱心な保護者が多く、幼稚園には協力的である。



本園は学級数5、園児数は各クラス28名で定員140名である。3歳児は1クラス、4歳児から新入園児を含め混合クラスとし、4・5歳児は2クラスずつである。

教職員は園長1名（大学教授兼任）、副園長1名、教諭5名、養護教諭1名、非常勤講師4名、事務員1名、計13名である。保育カウンセラーが配置され、子育て支援の一環として週1回活動している。また、警備員1名、週2回程度用務員2名が勤務している。

本園では、教育目標「うごく」「かんじる」「かんがえる」のもと、子どもたちが自分のしたい遊びを見つけ主体的に取り組む保育を実践している。そのため、保育者は子どもたちの姿や遊びの様子を丁寧に読み取り、適切な援助を行うようにしている。また、子どもたちが主体的に遊ぶために、保育計画の共有、子どもたちの動きに応じた連携、保育後に子どもの情報交換を行うなど、全教職員でチーム保育体制をとっている。



貴校の卒業生の活躍状況について：

修了生のほとんどが附属小学校へ進学するが、その後の追跡調査は行っていない。

貴校勤務経験者の先生方が公立学校・教育委員会などへ戻られた後の活躍状況について：

本園を退職した後3年間は、入園式、公開研究会、運動会、修了式などの行事に招待するため、名簿を管理しているが、その後の追跡調査は行っていない。しかし、隔月に「千葉乳幼児教育研究会」を本園と千葉大学教育学部幼児教育教室の共催で行っているため、退職後の元職員と交流する機会が多い。人事交流の職員は、公立学校や幼稚園、教育委員会などで活躍している。大学採用であった職員は、大学・短期大学や養成校で幼稚園教諭や保育士養成に携わっている人が多い。

魅力のある、特色のある、または、今後、公立学校へも展開できそうな先導的な取り組みなどについて：

幼稚園教育要領に則った質を重視した保育の実践

本園では、幼稚園教育要領に示されているように、教師は教育内容に基づいた適切な環境を意図的、計画的に作り出し、その環境に関わって子どもが主体性を十分に発揮し展開する生活や遊びを通して、望ましい方向に向かって幼児の発達を促す保育を行っている。この保育実践を発信するために、多くの参観を受け入れている。

園の研究

○子どもたちの“物語”を大切にする保育

本園では、子どもたちの“物語”を、幼稚園の教育課程という子どもたちが育つおおよその道筋としての「保育者が作る物語」と、子どもたち自身が「一人一人自ら作り出していく物語」という2つの側面から捉えている。また、子どもたちの物語が「一人一人の物語」、「私たちの物語」、「みんなで紡ぎだす物語」という相互的に関係性をもつものとして、遊びを通して「人」や「もの」と「出来事」などを含んだ環境との関わりを築き直しながら“物語”を豊かにする保育の追究を行っている。

○子どもが自ら動きたくなる園環境の研究

自分たちで動かし、遊びの場を作れる遊具（すのこ・ビールケースなど）を遊具として使う事を提案し、全国に発信した。



すのこやビールケースを使った遊び

千葉大学教育学部と連携した研究

千葉大学教育学部では、附属学校園教員と教育学部教員とがそれぞれの立場から意見を交換し、具体的な研究を行うことが大切であると考え「千葉大学教育学部－附属学校園間連携研究」の制度を行っている。（以下は代表的な研究）

○幼児の造形表現活動に働きかける教材

幼児が材料やもの、身の回りの環境に働きかけ、さらに表現活動へつなげていくような関わりが出来るように、砂場で絵画表現が出来る「カラー板」を作成し、その取組みについて検証している。



カラー板を使った活動

OHPS（ヘルスプロモーションスクール：健康的な学校作り）プロジェクト

平成22年度より、教育学部内で行っている。教職員・保護者・地域住民・専門家なども含めて、子どもを取り巻く全ての人々が連携協力する健康的な学校作りに関して、日本での推進と教育実践の開発に取り組んでいる。

千葉大学と連携した研究

○遊具の開発

平成 28 年度から工学部のデザイン科とともに、子どもたちが主体的に体を動かせるような遊具を試作し、設定してみるなどの検証をしている。

全国国立大学附属学校連盟幼稚園部会で取り組んだ研究

全国国立大学附属幼稚園の事例を持ち寄り、副園長を中心に以下の研究をまとめた。

○平成 26 年度文部科学省委託「幼児教育の改善・充実調査研究」多様性と関連性、協同性を育む指導のあり方に関する調査研究を受け、「多様性と関連性のある体験を通して幼児期の学びを深める実践研究」（代表：千葉大学）

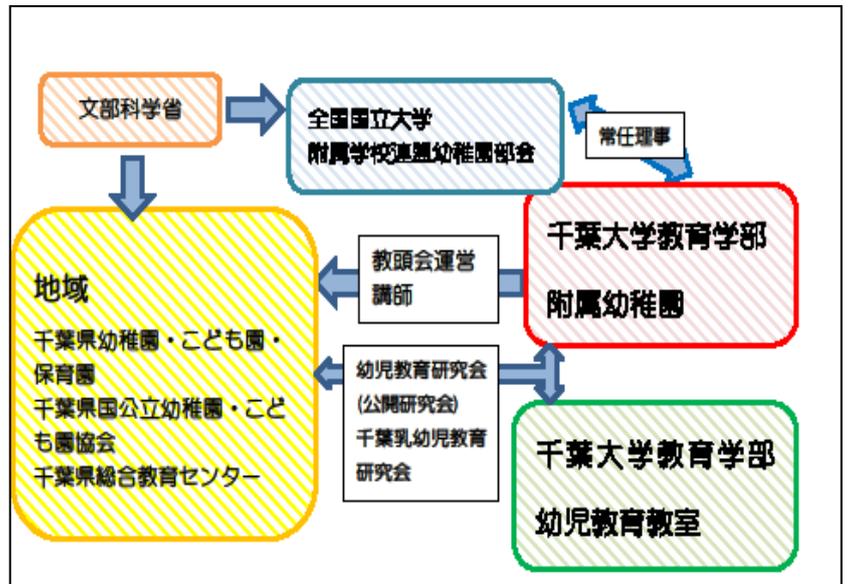
○平成 27 年度文部科学省委託「幼児期の質の向上に係る推進体制等の構築モデル調査研究」いわゆる「非認知的な能力」を育むための効果的な指導方法に関する調査研究を受け「幼児期の非認知的な能力の発達をとらえる研究—感性・表現の視点から—」（代表：お茶の水女子大学）

地域において、現在、貴校はどのような存在であると考えますか：

千葉県幼児教育の研究の中心拠点図

現在千葉市には国公立幼稚園が本園しかないため、幼稚園教育要領に則った保育を行っている唯一の幼稚園として、質を重視した保育を行っている。

また、全国国立大附属学校連盟幼稚園部会の常任理事を務め、文部科学省の目標とするところを情報として素早く収集し、千葉県の幼稚園に伝えている。また他の国立大学附属幼稚園の園長・副園長と連携して、各種の研究会を開催したり、文部科学省の委託研究を行ったりして、その結果を積極的に千葉県内外に発信している。



公開研究会・・・千葉県国公立幼稚園・こ

ども園協会との共催で、公開研究会を開き毎年 300 名程度の参加がある。公開保育や研究発表、著名な講師の講演を聴く機会を作っている。また、公開研究会以外にも、多くの参観者を受け入れている。

千葉県国公立幼稚園・こども園協会・・・附属幼稚園の副園長が協会の副会長、協会の教頭主任会の会長となって、研究をまとめ毎年冊子を千葉県の国公立幼稚園に配布している。

千葉県総合教育センター・・・教育センターと連携しながら、「新採研等初任者研修」「園長等運営管理協議会」「10 年経験者研修」において公開保育、講話を行うなど、研修の場を提供している。

千葉乳幼児教育研究会・・・教育学部幼児教育教室と連携して地域の保育者の研修技能を高めるために千葉乳幼児教育研究会を隔月開催している。毎回 30 名程度の幼児教育の関係者の参加がある。

附属学校の存在意義、貴校の存在意義について：

大学の中の幼児教育実践専門部門として

○千葉大学との連携

本学には、幼稚園教員養成課程(各学年約20名)があり、そのための実習機関、研究対象機関、幼児理解のための機関としての存在意義は大きい。

授業協力・・・幼稚園教員養成課程をはじめ、小学校教員養成課程や中学校教員養成課程、養護教諭養成課程の様々な授業の参観や調査研究を受け入れている。

研究協力・・・教育学部のみならず、工学部の学生の卒論・修論への協力、医学部学生の研究活動への協力を行っている。

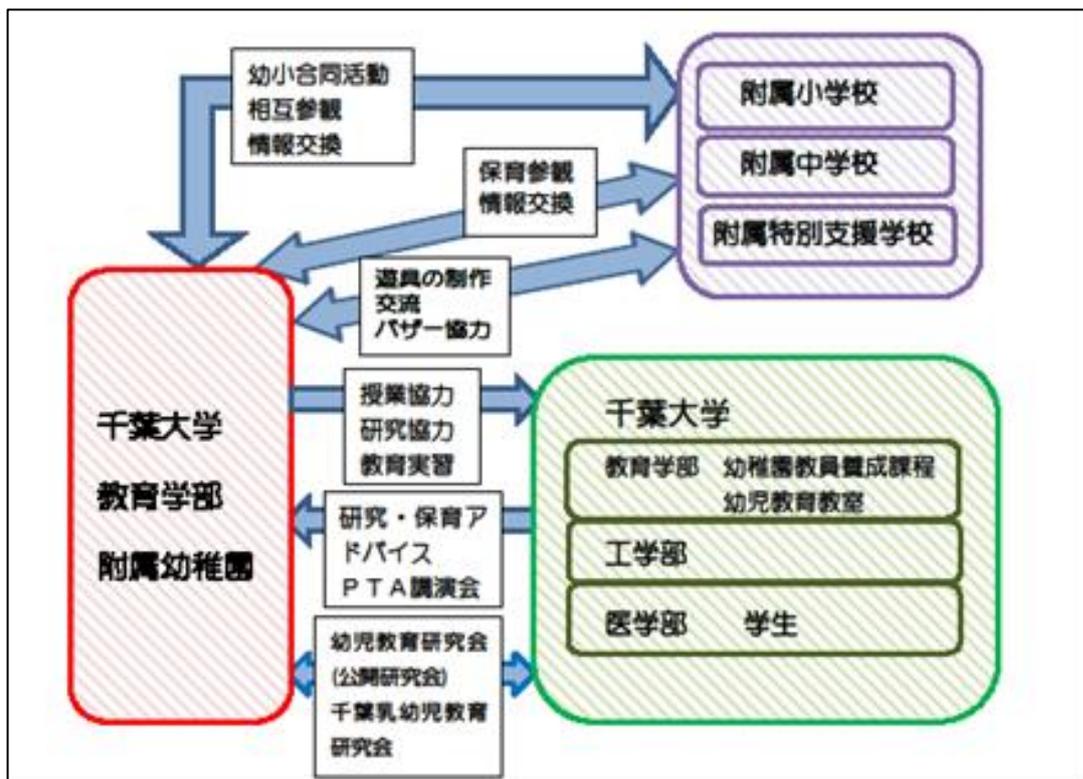
教育実習・・・実習の事前教育を行った後に、3年次後期に「基礎実習」を3週間、4年次前期に「発展実習」を2週間行っている。

○附属校間の連携

附属小学校・・・年3回の幼小合同活動や相互に保育・授業参観する中で、相互理解を図り、幼小接続のあり方を考えている。また、子どもについての情報交換も行っている

附属中学校・・・家庭科の保育の授業で幼児を観察に来る機会を年に一クラス1回ずつ作っている。

附属特別支援学校・・・単元学習の中で幼児の遊具作成や劇の公演をしてもらえるなど交流を持っている。特別支援学校のバザー（ふよう祭）への協力も行っている。



保育の質にこだわった幼児教育の実践園・研究園として

現在、社会的には働く母親が増え、幼児教育は質より施設の数を増やすことのみに着目されがちである。しかし、義務教育課程に接続する幼稚園はその基本作りのために重要な役割を担っている事を考えると、保育の質を大切にしていかななくてはならないことは自明である。

本園は、幼稚園教育要領に則り、子どもたちの自主性を大切にしながら遊びの中で様々なことを学ぶことが出来るように、保育者が援助したり環境を整えたりするということにこだわっている。質を大切にする保育を行うモデル園としての存在価値は大きい。

最近、地域のみならず他県や諸外国から様々な方々の参観・研修を受け入れている。